◆「現代中国政治とアジア世界平和構築」研究会

●朱光磊— 谢谢主席！我下面就加加美先生关于政治方面的这个报告，我谈两点看法，或者这么说，就是说我觉得加加美先生这个报告有两个突出的特点，给我留下很深的印象，第一就是加加美先生特别重视方法论的建设，包括对中国政治研究方面的方法论建设，这是加加美先生的研究工作还有这个组的工作的一大特色，这也正是加加美先生的高明之处。在这个方面，加加美先生的报告当中有这样一句话，就是由于种种变化，他说：这样只关注中央领导层的权力斗争和领导人的政策意识的研究方法逐渐失去了意义。这样一句话给我的印象非常深，这是我在一些相对比较大型的国际研讨会上，我是第一次听到这样的评价，因为在我们研究中国政治的这些教师、研究者当中是这么两部分人。一部分是比较喜欢研究中国政治生活当中高层的某些变化，做各种分析各种猜测，这种研究短时间非常容易受到重视，但是长时间时过境迁有的研究成果也就算了，但是在短时间内非常容易受到重视，媒体也非常感兴趣。还有一部分学者、教师比较注意研究中国政治生活当中一些基本面的变化，比如我们谈得比较多的阶层问题、工人的问题、农村的问题，甚至乡镇企业对农村社区政治生活变化的影响，研究这些基本面的变化，这些研究者的研究成果短时间里边有的时候媒体也不大关注，有关方面有的时候注意得也比较有限，但是从长期积累上看，这些研究人们往往就又相对比较重视，但是短时间有的时候人们容易比较忽视这些研究，这两种研究我觉得都很重要，但是我个人来说我更喜欢、我更关注对基本面变化的研究，所以先生这句话对我个人也是一个很大的鼓舞，这个给我留下的印象非常深。我想这也反映了我们这个领域研究在不断地深化，在不断地研究一些更带有基础性的东西，我对这个变化是给予充分的肯定，这是第一。第二，就加加美先生的这篇具体的报告而言，强调民意这个概念是一个突出的特点，也就是在这篇报告当中民意这个词我看看是出现频率最高了，这个也反映了政治学的研究在不断地从体制、对中国政治的研究在不断地从体制研究、制度研究向过程研究的一个转变，为什么这么讲呢？我刚才从上一个特点看，是体制上的一些事情，高层的一些变化。民意，我刚才说，它更接近于基本面。而且加加美先生在报告当中把民意、对民意的分析还和信息化社会这两个问题联系起来，因为信息化社会的到来对中国官方也好对中国社会也好，不管是从推动的角度讲、从压力的角度讲，影响都很大，对于推动民意的这种初步的某些变化还是起了非常重要的作用。但是在这里面我想提出一个问题来向加加美先生请教，就是“民意”一般来说相对和“意见表达”这个概念更集中、更接近一些，“民意”和“意见表达”，但是跟意见表达相关、相联系的另一个政治过程的环节是“意见综合”，从加加美先生报告的当中也几次提到就是反映民意的国家利益的形成以及在政策实施过程中自上而下对民意进行还原的反馈体系，这里边有引用的内容了，但是我想从谈话的行文当中我也感到加加美先生在分析民意的时候他是和反馈、和决策、和国家利益的形成联系得比较多，而这个又和意见综合的概念又联系得比较紧了。从学术上看，我希望，或者是说我请加加美先生如果有时间的话，对于民意这个概念更多地是和意见表达相联系还是和意见综合相联系，以及相关的问题能够谈谈，帮助我来理解这个问题，我就先谈这么多。谢谢！

●司会— はい。それでは加々美さんに質問が来ていますので、まず答えていただけますか。

●加々美— 民意という概念が民衆の意思を伝えるというか、下から上に伝えるという部分と、それから逆に民衆の意思をまとめていくというか、１つのかたちにするという２つのプロセスの違いがあるのではないかということです。そのとおりだと思います。

民意を総合していくというプロセスは、当然民意の間で、多様な意見をめぐって非常に豊かな議論がなされなくてはいけません。民衆レベルで、豊かな議論がなされて、そのプロセスのなか

で一定の民意というものが総合的に形成されていくことになります。

ところが、今の中国の現状では、例えば、インターネット上の掲示板で、そのような生産的な民意形成のための総合過程としての討論がおこなわれているとはみていません。

必ずしも民意形成はインターネットを通じてだけではなくて、さまざまなメディアを通じても形成されていくはずですし、また将来、ある意味では不可避的にそういう方向が生まれてくると思います。

最終的には、民意形成の制度化という問題がある程度成就しないと、あるいは法治と言ってもいいですが、法治的な安全弁がなければ、民衆の意思が相互の豊かな討論の過程を通じて総合されていくプロセスは安定的には進んでいきません。そういうプロセスが安定的には形成されません。

ですから、インターネットについて、一定の合理的な法治というものが形成されていかなければいけません。今はまだ無法状態です。無法状態であるということは、何も中国だけではありません。日本の場合もまったく同じです。欧米においてもそうです。その無法状態を、普通の社会、私たちが現に生きている社会が法治的な社会であるように、強権的な一党独裁による統制として法律を持ち込むのではなくて、そこに一定の無秩序ではない一定の法的保障、つまり民意を表出する、自分の意思を伝達しようとする民衆の法的保護と法的権利、法的義務がそこで確保されるといった措置が、これから求められていくでしょう。そのことの必要性は、徐々に気付き始めていると思っています。

例えば、日本でこの問題に深刻に取り組んでいる人、あるいは中国の人々もそうだと思いますが、総合の部分は、今は必ずしも民意形成の世界が法治的なものではなくて、かなり無法状態にあるので、ばらばらに拡散してしまっています。これを先ほど言われたような総合的なプロセスを生み出すためには、法治と一言で簡単に言ってしまってはいけないのですが、一定程度は法治的な措置が一必要になるだろうということです。

●司会— はい。それでは政治セッションに関して、フロアから質問なり、意見の表明があればお願いします。

●陸益龍— 我是中国人民大学社会学系陆益龙。我想请教加加美教授一个问题，就是您提到的民意和无根的民族主义，关于这个概念我想您提到这个无根的民族主义的时候是说它和民众的利益或者说尤其是与生命无关的，但是在当今这个全球化的时代，各个国家、各个群体之间都可能会有很多的利益的纷争，那么民族主义在这样一个全球化的时代，是不是也有和利益是有关系的，而不仅仅是无关的。我在中国农村的一些地方就看到，一些农民就有那种可能还称不上是反日的或者是反美的情绪，但可以说他们有一种对日对美的非友好的倾向，那么这样一些地区它可能不是我们所说的新闻媒体或者是什么宣传造成的，这样一种倾向也许是有草根性的，那么这样的一个问题又如何来解释呢？而且我觉得目前民众当中出现的这样一种意识倾向或者说是对日对美的不友好倾向，是不是有利益的或者说还有其他的原因？谢谢！

●加々美— 先ほど言いましたが、今の排日・反日的なものの中心的な力は、どちらかというと典型的にはインターネットの掲示板から、あるいはインターネットを通じてのコミュニケーションによって形成されている傾向が高いわけです。

ですから、田島さんがフロアから質問されたように、海外華人の動向がストレートに国内に影響を与えます。例えば、雲南省、四川省の農村の農民がパソコンを使ってインターネット上で、海外の情報を得て、それで運動を起こすということがあり得るかどうかという点を考えていただ

ければわかるわけです。

利益と深くかかわるかどうかの問題です。実際は、利益を厳密に考えていただければわかりますように、排日・反日の場合に、日本資本の超級市場（chaojishichang：スーパーマーケット）を攻撃しました。

しかし、そこで扱われている野菜やいろいろな生鮮食料は、全部中国から仕入れたものです。さらに、働いている人たちは中国人です。そこを攻撃することが、果たして中国の人たちの日々の生活の利益になるかといえば必ずしもそうではないわけです。

かつての抗日戦争の場合はそうではありませんでした。抗日戦争の場合は、現実に自分たちのイノチが危険に脅かされ、家や田畑が焼かれ破壊されるということがありました。そうした直接的利益から抗日に立ち上がったわけです。単に、日本が憎いというわけではありません。そういう意味では有根の民族主義（yougenminzuzhuyi）です。現在のナショナリズムについては、日本も中国も同じです。ともに排他性が強い、中国の反日と同じで、日本の中国に対する排中的な、あるいは反中的なナショナリズムも決して日本人のイノチを守るという意味での利益になるといったようなレベルのものではありません。

あえて言えば、尖閣諸島（釣魚島）の問題ですらそうです。果たして、急進的（jijinde：強烈な）方法が、例えば釣魚島にあのようなかたちで抗議をすることが、領海の問題をめぐる日本の国益だというわけですが、果たして、国益とはそんなに単純なものだろうか、日本の国益はそんなにつまらないものかという問題もあるわけです。

いずれにしても、その意味では政治もナショナリズムも、そうした環境学の問題だけではありません。ほかにも主に民俗学や文化人類学などが、等身大の世界、つまり基層社会のコミュニティの問題を研究対象にしています。

しかしこのようなコミュニティの問題に直接立ち入って研究している人たちが、ナショナリズムとのかかわりの問題をほとんど方法的に問題にしてこなかったわけです。コミュニティの問題はさまざまな局面でナショナリズムに直結する問題であり続けました。

日本の場合も、戦後はアメリカが日本を占領統治していましたので、その占領軍が私たち日本人の基層社会であるコミュニティに与える脅威は大変大きなものでした。

だからこそ反米的なナショナリズムが起きたのです。反米的なナショナリズムは、日本の場合、1970 年代を境にして消えていきますが、そこまでは反米ナショナリズムはコミュニティから発するという意味で明らかに有根の民族主義(yougenminzuzhuyi）でした。それが、1980 年代を過ぎてコミュニティとのつながりを失って無根のナショナリズムへと次第に変わっていくというプロセスをたどる。ほぼ同じ時期、中国のナショナリズムも無根化する。日中の無根のナショナリズム、無根の政治同士がぶつかり合う時代に突入してくる。それをどのようにネジを巻き戻すかという問題、方法論的にどこに視点を置いて見るかということが重要な問題になるというのが、方法論研究会の問題関心の１つになっています。

●司会―　どうもありがとうございました。

それでは次に経済セッションに移りたいと思います。愛知大学の川井伸一先生にお願いをします。